

# 温州みかんの次年度生産対策について

日本園芸農業協同組合連合会 技術主管 佐藤 義彦



## はじめに

温州みかんの生産現場では、労働力不足等が進行中、栽培の基本管理が徹底されないなど、隔年結果が顕在化するとともに、生産量の減少傾向に歯止めがかからない状況にあります(図1)。そこで、高品質果実の連年安定生産に向けて、まずは早期の樹勢回復、次に基本管理を中心に令和6年産で見込まれる着花(果)量を考慮した作業を織り込んでいくことが重要ではないでしょうか。

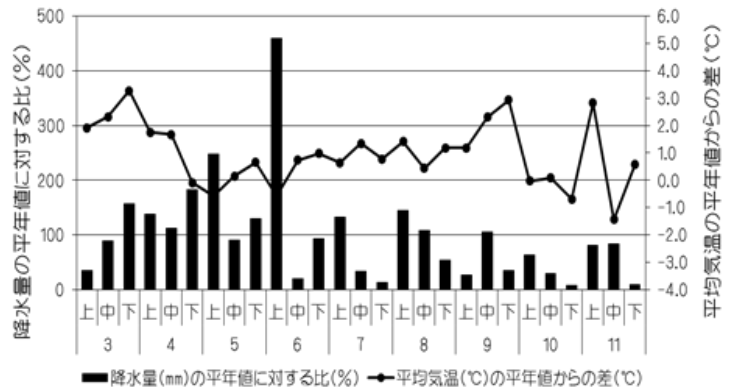


図2 2023年3月～11月の主要温州みかん産地における気候  
※ 平年値は30年間(1991～2020年)の観測値の平均

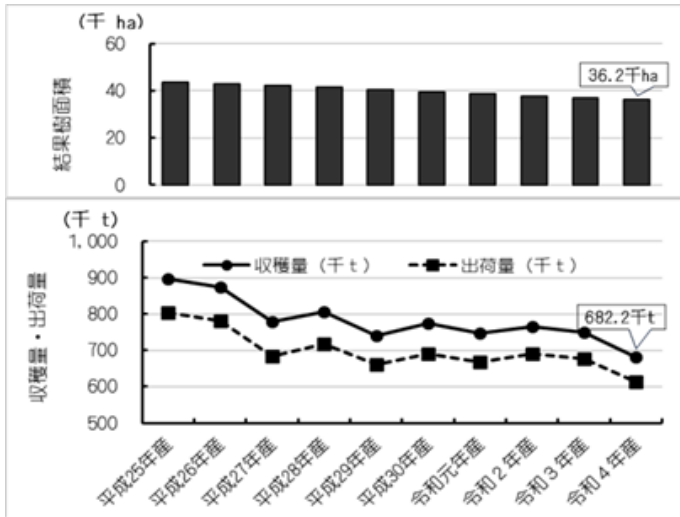


図1 温州みかんの結果樹面積、収穫量、出荷量の推移  
(農林水産省統計部「果樹生産出荷統計」より作図)

## 収穫後における樹勢回復対策

令和5年産温州みかん栽培を振り返ると、梅雨明け後、高温や乾燥が続いたことにより(図2)、過度な水分ストレスが付与され、樹体栄養が大幅に消耗した園地もあったのではないのでしょうか。そのため、次年度産対策としては、収穫後の速やかな樹勢回復対策が必須であり、これにより、その後の高品質果実の連年安定対策の遂行へと円滑に繋がっていくものと思います。

## 1) 適期収穫の徹底

収穫が遅れると樹体と果実の養分競合が長く続くので樹勢回復が遅れ、翌年の着花や花の体質等に影響するので、適期収穫に努めましょう。

## 2) 灌水の実施

シートマルチ栽培園では、収穫後、直ちにシートマルチを除去して降雨を入れ、降雨が少ない場合には、灌水をして速やかに水分ストレスを緩和することが大切です。

また、近年の気象条件において連年安定生産を可能にするためには灌水が必要不可欠な管理となっているので、適期に、効率的に灌水ができるような設備の設置が必要です。

## 3) 施肥管理

秋肥の適期施用により、①収穫により収奪された養分を補給、②着果負担や水分ストレスからの回復、③貯蔵養分を高めること等により、次年産の新梢、着花確保、耐寒性向上による冬季の落葉防止が期待されます。この場合、地温が12℃以下になると細根の活性が低下し、肥料成分の吸収が抑制されるので、秋肥を適期に施用することが重要です。

収穫後の葉面散布は秋肥の補助として樹体栄養の向上を図るために効果的な手段です。チッ素主体の葉面散布を収穫後、比較的暖かい日を選んで複数回(例:尿素 300~500 倍希釈液を 10 日間隔で 3 回程度)行うことで葉中チッ素濃度を高めることができます。

#### 4) 冬季の土壤乾燥防止

冬季、地温が0℃に近い時、風速7m/秒以上の風が吹くと落葉の被害が大きくなるといわれています。旧葉は貯蔵養分を生産・蓄積しているため、過度に落葉を起こしてしまうと貯蔵養分が減少し、樹勢低下や隔年結果を引き起こしてしまいます。降雨が少なく、乾燥が続いた場合は、灌水や葉への散水を行うと良いとされています(図3)。

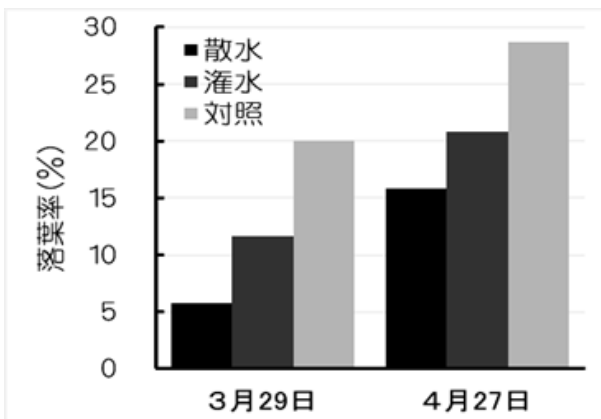


図3 冬季の灌水処理が落葉に及ぼす影響 (鈴木ら 1968)

### 令和6年産温州みかんの生産対策

令和6年産温州みかんは、大筋で中四国・九州の産地はうら年、近畿・東海の産地はおもて年傾向を示すものと見込まれています。また、同一園内に、同一品種でありながら着果量が多い樹と少ない樹が混在する園が至る所で観察されます。このような中で連年安定生産を実現するためには、着花量の多い樹、着花量の少ない樹それぞれに対応した別メニューで管理す

ることが望まれます。

#### 1) 着果量が多い樹に対する管理

早期に着花負担を軽減するとともに、次年度を見据えた次のような管理が重要です。

- ① 開花による養分消耗が激しいので、開花期中に花肥を施用しましょう。
- ② 主に裾なり果、内なり果を中心とした早期摘果に努め、労力的に困難な場合は摘果剤(フィガロン、ターム)の利用、枝別全摘果等の導入を試みましょう。
- ③ 樹冠上部全摘果、有葉花摘蕾、スッコキなど摘蕾・摘葉処理で次年産の結果母枝を確保し、隔年結果の是正に努めましょう。
- ④ 翌年の花芽抑制、樹勢維持のため、11月~翌年1月(収穫後)に、2.5ppm ジベレリンとマシン油乳剤 60~80 倍液の混用散布を試みましょう。

#### 2) 着果量の少ない樹に対する管理

生理落果を抑制するなど着果確保に努め、現在ある果実を確実に秀品に仕上げるような管理を徹底することが肝要です。

- ① 果実に配分される養分を増加させて生理落果を抑制するため、着花(果)周辺の新梢を除去しましょう。
- ② せん定時期は通常の時期より遅くし、軽い間引きせん定を中心に実施しましょう。
- ③ 日照量を確保して結実率の向上を図るため着花部位への被さり枝を剪除しましょう。
- ④ 新梢と果実との養分競合を軽減するため、チッ素資材やカルシウム剤の葉面散布を実施しましょう(開花期前から一次生理落果が始まる前まで3回程度)。

### おわりに

夏秋期の高温・乾燥などに代表される異常気象が頻発・恒常化し、樹体にストレスがかかっ

ています。加えて、マルチ栽培、フィガロン処理、後期重点摘果など、水分ストレスや着果ストレスにより品質を向上させる技術が推奨されていますが、これらによる樹体への負担も少なくありません。そこで、収穫後の樹勢回復対策等により、樹相を健全な状態にリセットして、次年産の栽培管理をスタートさせていただきたいものです。